編集後記

第一一六号の誌面をお借りして、年頭のお祝詞を申し上げあわせて、会員の皆様の御健勝をお祈り申し上げます。

さて、巻頭の成田勝氏の玉稿は、明治十年代の県内の国立銀行の消長と経営実態を論証されたもので、本県の近代化の究明に新視点を提示されている。松岡実氏の「日羅の研究」は、かねてから宇佐大神氏豊後進出説を疑問視されている氏が、今回は日羅の実像を追求することによって、自説を補強されたものである。批判のないところには、学問の自由も進歩もあり得ない。その意味から、本誌上でも活潑な論争が展開されるのを期待したい。

高原三郎氏の博学な知識は、後進の私たちには参考となる点が多い。また、大塚主氏の現地を歩いて歴史を再構築しょうと試みられている点にも敬意を表したい。最後に、後藤安臣氏の寄せられた「麻田剛立生誕二百五十年に当って」の思いは、杵築藩関係者として、また杵築市民として当然な感懐と共感する次第である。

（小玉）

昭和五十九年十二月二十五日　印刷
昭和五十九年十二月　三十　日　発行

大分県地方史　第一一六号

編集者　小　玉　洋　美
発行者　渡　辺　澄　夫
印刷者　中　尾　寿　孝

別府市中央町九―一五
印刷所　日の丸印刷株式会社
（電話　㉒〇三四一）

発行所
〒八七〇―一一　大分市旦ノ原七〇〇
大分大学教育学部国史研究室内
大分県地方史研究会
（振替・下関八―五二九四番）